会報 62号

aaca

津波

東京駅ドーム　レリーフ

東京天文台・日時計

東京駅丸の内駅舎保存・復原工事

総会（予算総会・通常総会） 文化庁　新進芸術家海外研修制度　募集案内		2
講演「東日本大震災から一年」	氏家清一	3～5
講演「東京駅丸の内駅舎保存・復元工事」	鹿島建設㈱	6～7
時代の華一輪	山本　誠	8
第177回　aacaフォーラム	小野行雄	9～10
24年度　aaca会員展 東日本大震災　「芸術環境復興預金」への募金のお願い		11～15
トピックス（会員・訃報）		16

2012年8月

社団法人
日本建築美術工芸協会

総会

＊　24年度予算総会

平成24年度予算総会は　3月14日(水)午後5時45分より建築会館大ホールにて、会員220名(内、議決権行使書・委任状提出166名）の出席を得て開催された。 定款に従い中島昌信会長が議長に、議長より大成 浩、野口真理両会員が議事録署名人に指名、審議が開始された。第一号議案・平成24年度事業計画に関する件、第二号議案・平成24年度収支予算書に関する件は石田総務委員長より議案の説明が有り、議長の採決により満場一致にて承認された。

議事の終了に際し、中島昌信会長より24年度の所信が述べられ、基本事業である表彰事業、講演会・フォーラム事業の活性化、特に展覧会事業として会員展覧会、企画展覧会の二本立てで実施される事に期待していると表明された。

また来年は25周年を迎える事、新法人としての歩みを始めるその準備年として活動を全ての会員に要請された。

議事の後、氏家清一会員から「東日本大震災から一年を経過して ー記憶・絆・復興ー 」の演題で講演を頂いた。

仙台市在住の建築家で実際に事務所も被害に遭われ、避難所で過ごされたご経験とこの1年の被災地でのJIAの調査・復興支援状況・地域への提案など多くの報告を頂き、又これから協会の果たすべき役割についてもお話がありました。

今後の協会委員会活動に加えて行く可能性を頂きました。講演の詳細は本誌3～5ページに掲載しています。

最後に出席者全員が、氏家会員を中心ににぎやかに参加者の交流会が行われ、20時に散会した。

＊　24年度通常総会

平成24年度通常総会は　6月14日(木)午後5時30分より建築会館大ホールにて、会員197名(内、議決権行使書・委任状提出115名）の出席を得て開催された。定款に従い中島昌信会長が議長に、議長より鍵井保秀、中村茂幸両会員が議事録署名人に指名、審議が開始された。第一号議案・平成23年度事業報告に関する件、第二号議案・平成23年度収支計算書に関する件は石田総務委員長より議案の説明が有り、又中島三枝子監事より23年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長の採決により満場一致にて承認されました。

そののち中島議長より、東日本大震災による文化財及び地域の文化の復興ため、50万円を預託したいとの提案があり、満場一致にて承認された。

議事の終了後、法人会員・鹿島建設㈱ 東京建築支店　金丸所長・日比次長より「東京駅丸の内駅舎保存・復原工事」の演題で講演を頂きました。まさに竣工前の諸検査の進行している多忙な時期での講演でしたが、貴重なお話を伺いました。

丸の内駅舎は1914年(大正3)、建築家　辰野金吾の設計により建設され、アムステルダム駅を模したと言われ優美な姿日本を代表する建物として親しまれていましたが、第二次世界大戦の空襲により被災し、建設当初の姿は失われ応急修理により2階建となり、屋根のドームも角屋根となってしまいました。2003年(平成15)に重要文化財の指定を受け、このたび当初の姿の３階建てに、ドーム屋根も創建当時の形に、免震装置を配置し巨大地震にも対応する工事が実施されました。

工事は、日本最大の駅機能や多数の乗降客を妨げることも無く、繊細で用意周到な気配りで実施されています。

10月のオープン後は優美な姿を現し、復原されたドームの内部も見ることが出来ます。また東京駅ステーションホテ
ステーションギャラリーも同時にオープンし、多くの人々を魅了することになります。協会としても見学会などの企画を準備してゆく予定であります。　講演の詳細は本誌６～７ページに掲載いたしました。

最後に出席者全員が、金丸所長・日比次長を中心に賑やかに参加者の交流会が行われ、20時30分に散会しました。

平成25年度　新進芸術家海外研修制度　募集案内

（aacaは表記制度の書類提出団体に認定されています。）

1、趣　旨：我国の将来の文化芸術の振興を担う人材を育成するため、各分野の若手芸術家等に、海外で実践的な研修に従事する機会を提供するため、各研修員が海外の芸術団体、劇場等で実地研修する際の渡航費・滞在費を支援します。

2、派遣期間：1年・2年・3年・特別(80日)・高校生

3、対象者：(1)日本国籍又は日本の永住資格を有する者
(2)年齢条件　派遣期間のより定める
(3)専門分野で芸術活動の実績が有る者
(4)研修先での語学力を有する者
(5)研修先での施設の受入保証が有る事
(6)高校生は保護者の同意のある事

4、募集期間：6月中旬～8月中旬

5、提出団体から文化庁への提出期限　8月中旬

6、一次選考（書類）　10～11月

7、二次選考（面接）　12～ 1月

8、選考結果の通知　　2～ 3月

詳細は協会事務局へお問い合わせください。

予算総会講演

東日本大震災から一年を経過して「記憶・絆・復興」

氏家清一
氏家建築設計事務所　所長
日本建築美術工芸協会会員
日本建築家協会会員　宮城県地域会
東北工業大学建築学科講師

それでは、あの日の大津波の映像が有りますので記憶を呼び戻して頂ければと云うことで見て頂きたいと思います。宜しくお願い致します。

はい、あの津波です。今回の災害に関しまして、ほんとうに全国の皆様からご支援を頂きました事を仙台の人間として御礼を申し上げたいと思います。

実は、私の会社も被害をうけており、当日が創立記念日でありました。私は震度７の被害を受けた宮城県の栗原市から帰る高速道路で走っている時に地震に遭いました。路肩に止め、長かったです３分くらいずーと揺れ続けて、おさまったということで走りましたら、即、インターチェンジで下ろされてそこから延々と渋滞が続いて、ほかの仕事の関係で工事現場の管理に行く必要があったのですが、普段20分位のところが、２時間ほど掛かり会社に戻りましたが、事務所の中はもう散々で、パソコンが４メーターくらい飛んだり、本とかカタログが散在しておりまして中に入れなくて私自身も２日ほど、避難所の小学校で、電気もないガスも来ないという状況で過しました。当日は地震の後に雪がすごく降りまして非常に寒かったんですが、小学校の体育館に集まって過ごしたということでございます。

3月11日の地震による建物の被害は津波によるものが多かったのですが、実際はそれ以降の地震による被害の方が非常に多かったのが実情で、仙台市では住宅の耐震補強がある程度進んでいたため、津波が無ければ死者の数も100人とかそれ以下の数字で済んだと思います。

ここで当時の建築物の被災状況をご覧ください。

JIA、建築家協会、設計事務所協会、建築士会等が行政と協力して応急危険度判定のため、状況を調査に行った時の写真です。

仙台市若葉地区。卸町という工業団地の倉庫や施設がこの様な状況でした。

次は今回震度７と一番揺れの大きかった、栗原市の土蔵の被害の状況です。

土蔵は今回相当多数被害を受けておりJIA保存部会と建築学会と共に歴史的な建造物の一つとして調査をしています。

これは、仙台市折立地区で、造成をした土地が地滑りで全部こういう形で崩壊した地区の写真です。

今もその侭です。宅地造成する場合は盛り土切り土で、盛り土の部分がこういう形で被害が大きくなり、仙台市内では団地造成が非常に進み、郊外等にも丘陵地を切り崩したりして作られた団地があるんですが、そういう所も擁壁等が崩壊している被害が多くみられました。

私共が調査に行ったところの写真ですが、左上の酒蔵は一関のお酒屋さんの石倉で、妻側の上の部分が崩壊したところで、今はビニールシートで覆われています。

その下は気仙沼の港のすぐ前の、男山酒造という酒屋さんで二階建てです。一階が津波で流されそのまま潰されて、二階部分がそのまま上に乗った形で残されました。

中央は多賀城市内の土蔵の被害状況です。右上は栗原市に栗原田園鉄道というローカル線がありましたが、廃線により駅舎を保存し公園としましたが、車庫に電車が入っているのですが、50年位経っている為柱が折れ補強が必要と調査に行ったところです。下は気仙沼市の本吉地区というところにある木造の小学校の校舎です。もう60年位経つ建物なんですが、丘陵地に建っており地割れがおきまして基礎等が崩壊して、保存の計画も有りましたが、危険と言うことで解体の準備をするということで、学会の先生方と行ったときの写真です。

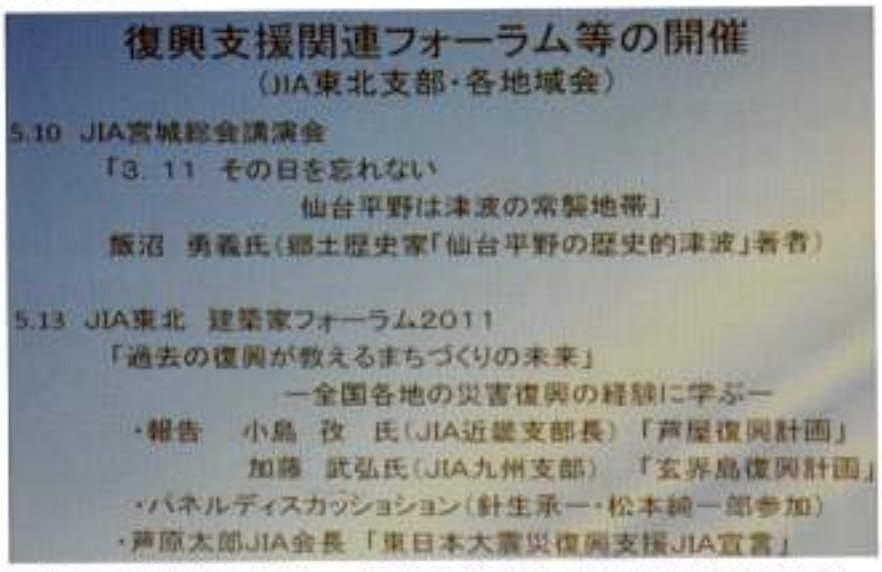
ここで私共の一年間の仕事を紹介させていただきます。

まずはじめにボランティアで参加させて頂いた仕事は、応急危険度判定ということで、行政から招集を掛けられ仙台市・周辺市町村に配属され、赤・黄色そして緑の紙を張る作業でした。自分の事務所はほっぽり投げで、駆りだされました。去年の被災の日から入っていない部屋

があり、書類が散在したままどこに書類が入っているのか判らない状況で私もほとんど休んでいないのが事実です。

JIAでは仙台市に東北支部があり、事務局に宮城県内の会員を中心に集まりました。ボランティア活動、色々な支援活動をするという事で、応急危険度判定をしながら住宅の被災の調査の相談や建築相談も開始しました。そうしますと、事務局の電話が鳴り続け、一日に何十件という日が一ヶ月以上続きました。あと個別においでいただいた相談とか現地見てほしいという事で活動をしていました。いまだに、ぽつぽつとですが相談があります。

そんな中で被害の調査だけやっていてもしょうがないということで、阪神大震災や中越地震で被害を受けた方々や、震災からの復興に関係したの方々から来て頂いて勉強会を重ねました。又フォーラムも開催しました。

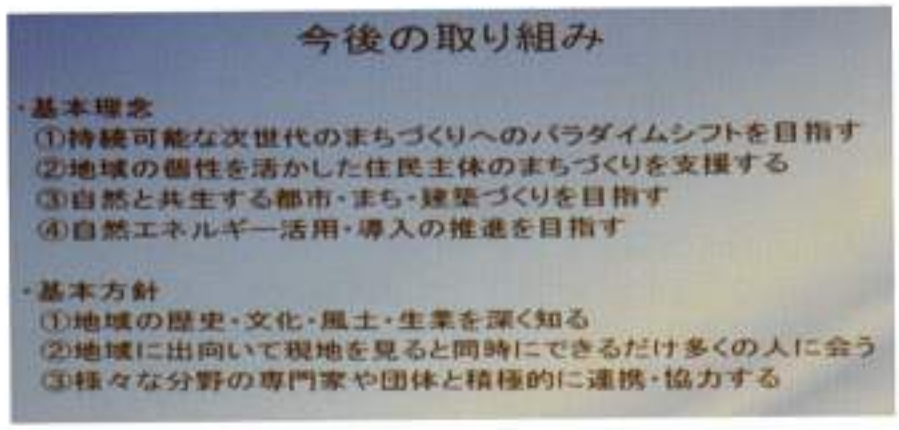


次に手掛けた事は、仮設の住宅を作るという事です。宮城県はプレハブ協会と協定を結んでいて、プレハブ住宅を建てたのですが、非常に遅い事や数が膨大な事、福島は原発の被害もあり非難してくる方が非常に多かったもので、仮設住宅も地元の大工さんを使って出来ないかと、建築家の有吉さんが計画されました。

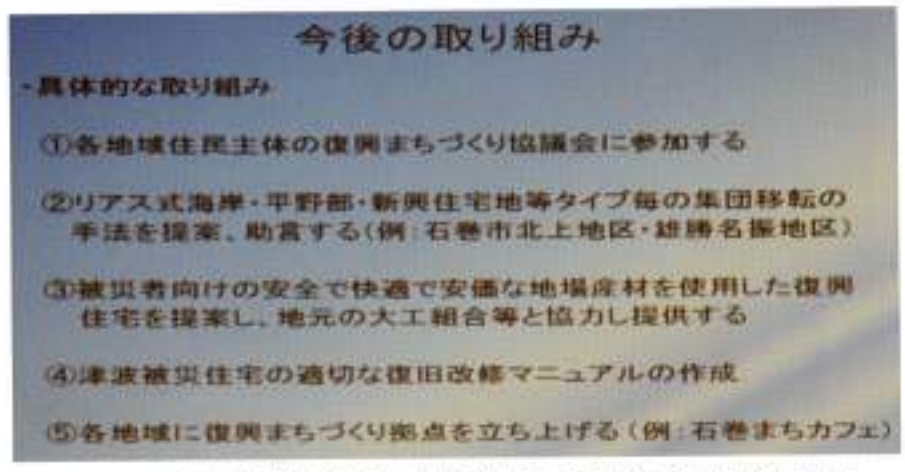
これは福島の三春町でJIAのメンバーが仮設住宅を計画し地元の工務店で計画を作って応募した案でございます。三春町で審査され、採用となり実際に建設されました。

今度は復興支援活動ということで、JIAも含め市民団体含め、とにかく拠点が必要とのことで、石巻・名取・亘理の3か所にカフェという名称で、何でも相談来てください、話だけでもということで人が集まる部分を、企業の支援を戴くようなシステムがございましたので、資金援助を得て開設させて頂き、JIAのメンバーがそこに詰めて皆さんと話をしながら、復興をどうしたらいいんだろうかという話させていただきました。

今後の取り組みにつきましては、私どもまちづくりをどうしたらいいんだろうか、ということで、やっていくわけですけれども、まず仮設住宅にいま入っている方々です。農村部、要するに過疎地域でので高齢者の方々、年金生活者の方々が非常に多いんですね。ですから、なかなか自分で自活する、自立をするのは難しく、若い人たちは子どもの学校のこと等ありますので、都市部のほうに出て生活、仕事を見つけて生活を始めています。



その中で、どうやってその地域を作っていくのか、町づくりをどうするのかということが問題になってきております。ぜひ皆さんは地元においでいただいて、見て頂いてどういうようなことが良いのか、その過疎の地域をどうしたら良いのか、この辺のところを地元の人たちと一緒に考えて頂くのがい良いかなと考えております。



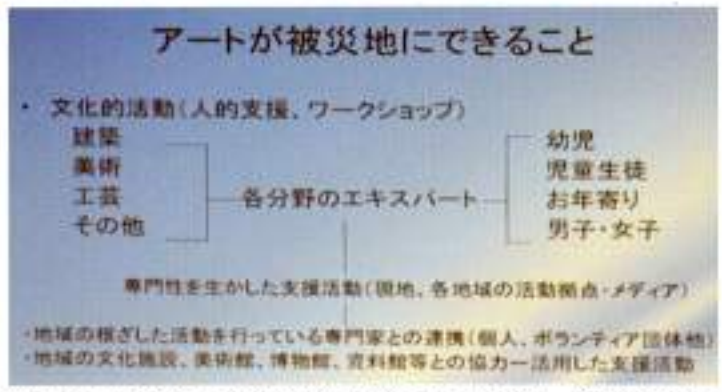
いろいろな地域があり、いろいろなタイプがあります。リアス式海岸平野部、修理工場とか住宅地とか、地域によって形態が違ってきますので、復興の仕方、そういうものも変わってくるのではないかというふうに思います

ので、ぜひご協力のほどお願いしたいと思います。

いろいろな構想のものが出ています。これは閖上地区の復興計画を建築家針生先生とJIAのグループと地域の人達と一緒になって作成したスケッチです。

これ名取市の沿岸部、真ん中に紫色の線が入っていますが、これが三陸道という高速道路です。ここのところまで津波が来ています。その内側はそのトンネル部分から流れ込んだ水で浸水し壊滅状態でした。JIA はこうゆうかたちで様々な提案をしています。いろいろな会議態を組織し、地域の人たち、さまざまな組合組織、と協議を重ねて、知恵を持ち寄って町の復興へ向け進めております。

私どもは、人が集まって地域を起こすのに何が必要かというと、やはり一番最初は仕事がないとそこに人が集まらないということです。仕事があって初めて人が動いて、お金がおりてきて使ったり、会話ができたりいろんな活動ができてきます。　まず産業が復興していかないと次に進まないだろうということです。いま、復興復興という話をしていますが、まだ私ども現場で感じている人間は復興というよりも、まだ被害の後処理と復旧です。ご存知の通り瓦礫の処理も全然終わっていません。道路とか被害を受けた所の付けは終わっていますが、まだまだ瓦礫が山になっています。ですから、そこが片付かないとまだ次に進めないのかと、思っています。　地域の皆さんが集まって色々なコミュニティーができたり、いろんな計画ができているのですが、全体的な計画ができていませんし固まっていません、資金の問題が当然ありますのでやはりそこで止まっているというような状況です。　今日お話しさせていただいて、協会から何ができるんだろうか、という事のお話をということお話をいただきました。いろんな方がボランティアとして、炊き出しやケアの形で入られたり、芸能人とかスポーツ選手が活動されています。お願いしたいのは、みなさんすでに現場に来て頂いた方もいると思いますが、ぜひ１回、現地を見てください、肌で感じてください。特に名取それから南三陸町、気仙沼、火災があって凄い油、焦げ臭い、それから、女川町です。石巻もそうなんですが、そこに行くと空気がちがいます。人が住んでいたり、或いはゴーストタウン、それ以上の空気、雰囲気になります。そこの道路行って入り江のほうに開けてくる、山から行くとすさまじい光景になります。それをまず感じて頂きたい。



協会で何ができるのかということで、建築であれば、その地区の人たちと一緒になってですね、復興計画の手伝い等をはできると思いますすが、映像の下から二段目に書いてありますが、地元で活動している人、色々な芸術家の人達がいます。そういう人達と一緒に活動してほしい。ボランティアでも何でもいいですから活動してほしい。今置き去りにされているのは、美術館・博物館・資料館、そういう施設は、いま後回しです。やっとですね、気仙沼の美術館が瓦礫の収集をしたり、そういうものも展示をしようということで、学芸員の方々が動き始まっています。ですから、皆さんの専門分野の色々な施設があると思います、そういう所を地域の役所を通して団体として入っていただくことは、可能ですので、そういう協力、そこで何ができるのか。絵やイラストを描いたり、線香・ろうそくを作ったりとか。老若男女問はず、年寄りの方は仮設住宅で手持ち無沙汰で過ごしていますので、ぜひどこかの地域で一緒に活動していただければな、というふうに思います。

歴史的建造物も被害を受けています。
上は、有備館といって伊達家の学問所で国宝の茅葺きの建物なんですが全部潰れてしまいました。 下も気仙沼の尾形家住宅も潰れました。それからさっきお話した蔵も潰れています、被害の大きいのはやはり酒蔵とかですね、建築学会の担当の先生方と一緒にそういう活動もさせていただいております。

終わりに何度も繰り返しますが、aacaの会員の方も現に来て頂いて地域の方々と一緒になって何かしらの活動をして頂きたい。資金的な部分よりも何かして頂く、専門の分野で、絵を描いたり粘土でものを創ったりする事でもかまわないと思います。ぜひ現地へおいでください。

通常総会講演

東京駅丸の内駅舎保存・復原工事

鹿島建設株式会社東京建築支店
東京駅丸の内駅舎保存・復原工事共同企業体
所　長　金丸康男
次　長　日比純一

金丸康男氏

日比純一氏

はじめに

工事は2007年4月に着工いたし5年が経過しています。

写真が二枚ありますが、上が創建時1914(大正3)年の駅の姿で下が2007年の今回の工事の着工時の姿です。

大きく特徴的に違うのが南北ドームの屋根で八角寄棟型ですが、創建時はタマネギ型状のドーム屋根でありました。中央部は似ておりますが装飾等で若干違いがあります。昭和20年の東京大空襲で三階部分が焼失、その後二階建てに改造され使われてきました。

今回は創建時の三階建ての姿に復原する工事を致しました。

建物の構造は鉄骨煉瓦造であります。

設計者の辰野金吾ですが、赤煉瓦と白い石材と擬石を使った白い帯の特徴的な意匠で、あちこちの建物を設計しておりました。

内部の東京ステーションホテルは、東京駅が開場した翌年にホテルとして開業、内田百閒、川端康成、松本清張、江戸川乱歩などの文豪が宿泊し文筆活動をしたと聞いております。

作家それぞれに指定された部屋がありました。

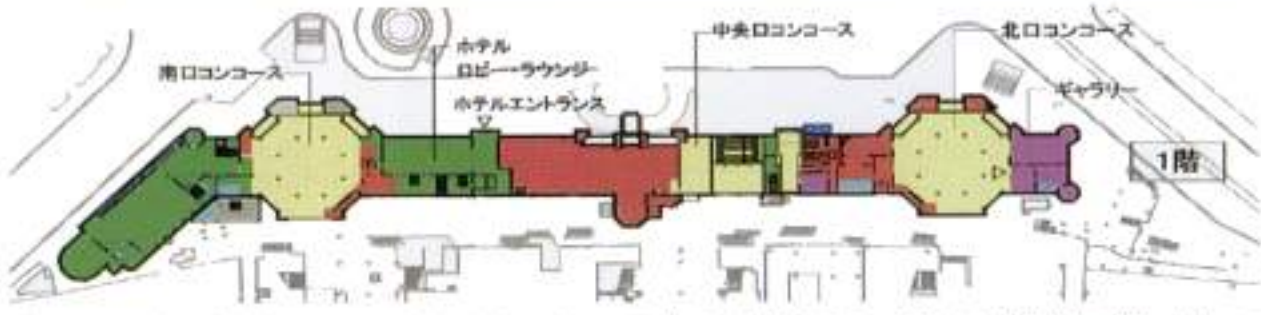
建物用途は、ホテルと駅施設とギャラリーが主要部分です。ホテルは当初72室でしたが倍の150室になり気品の高い豪華なホテルとして再生いたしました。今回の復原では3階の中央部分の駅側の屋根裏を現代感覚のトップライトとしてガラス張りとし、宿泊者専用のゲストラウンジとして整備されています。

駅施設は南北のドームと中央が改札部分となり、中央部には貴賓エリアが設けられ、車寄せから続く皇族専用の部屋が復原されました。

ステーションギャラリーは展示施設として北端部の1階から3階に復元し、レンガ壁を見せながら展示を行う施設となっています。

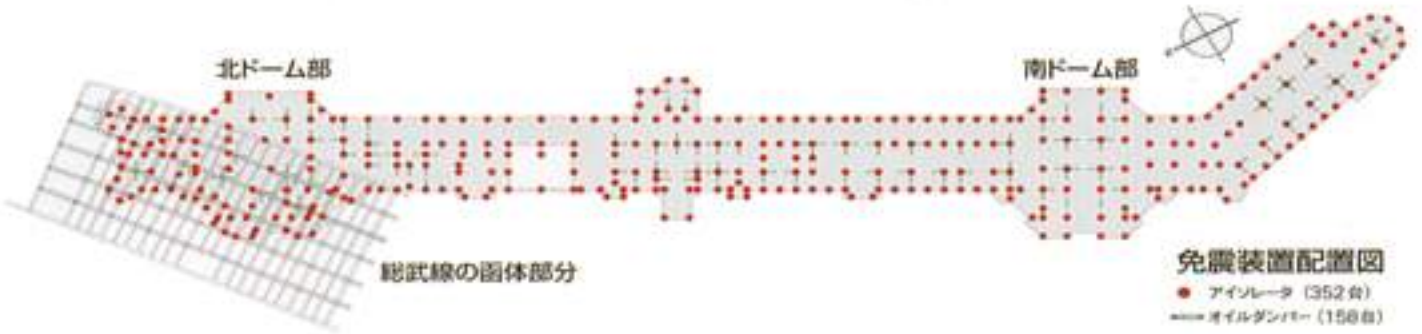
地下は駐車場、設備機械室が主でホテルのスパ・理容室もあります。

工事名称	東京駅丸の内駅舎保存・復原	
施主	東日本旅客鉄道株式会社	
工事場所	東京都千代田区丸の内一丁目9番1号	
工期	平成19年4月から平成24年10月	
工事概要	既　存	計　画
延床面積	約19,600 ㎡	約43,000 ㎡
高さ	最高高さ：約33.0m 軒高：約12.5m	最高高さ：約46.1m 軒高：約16.7m
階数	地上2 階（一部3 階） 地下1 階	地上3 階（一部4 階） 地下2 階
主要用途	駅施設（約6,600 ㎡） ホテル（約5,600 ㎡） ｽﾃｰｼｮﾝｷﾞｬﾗﾘｰ（約1,000 ㎡）	駅施設（約7,900 ㎡） ホテル（約20,800 ㎡） ｽﾃｰｼｮﾝｷﾞｬﾗﾘｰ（約3,200 ㎡） 駐車場（約3,600 ㎡）
構造	鉄骨レンガ造	（地下）RC造、 （地上）鉄骨レンガ造+S造+SRC造（免震構造）



駅舎の免震化について　創建時の駅舎は1万本の松杭の上に建っておりました。松杭は60cm間隔に打たれており、その上にコンクリートの基礎、そして煉瓦の壁が乗っている構造になっておりました。掘り出した松杭を切断しましたら非常にフレッシュで,切った所から松特有の匂いも発生し、健全な状況で百年間も駅舎を支えてきたことを覗わせました。数本を薬剤処理し残りは産業廃棄物として処分しました。この駅舎の仮受け工事に当って新たなH杭を450本打ちました、殆どが建物の中での施工でＴＢＨ工法を採用し小さな機械で杭を打っております。機械を寝かせた状態で建物の中に入れ、内部で建て起こしそこで杭の穴を掘るといった工事でした。場所によってはドアの

開口部のミリ単位の隙間を狙って機械を搬入するのですが、搬入不可能な場合は機械を解体して持ち込んだこともありました。この仮設の鉄骨杭の上に新しい一階の構造体を作り駅舎を乗せることにいたしました。仮受け完了後逆打ち工法により地下1·2階を新設。その後約3ヵ月かけ仮受け支柱から免震装置に駅舎の荷重を移し、免震化を完了させました。地上と地下1階の間に設けられた免震層は、高さ180cmの空間は梁が突出し実際には70cmしか無く、この狭所にアイソレータ352台・オイルダンパー158台が設置されました。



重要文化財　煉瓦駅舎の復原工事について

およそ100年前に建てられた赤煉瓦駅舎、その保存と復原には最新の建設技術は勿論、貴重な伝統的技術も欠かせられないものでした。駅舎の保存・復原工事はどの様に進められたのか、屋根や外壁など外から見えるや装飾物を中心にその技をお話します。現存部分を活用して可能な限り創建当時の状態を保つ保存、そして現存していない部分をオリジナルに忠実に再現する復原、二つの観点で工事は進められました。保存については国の重要文化財に指定されている東京駅の歴史的文化的価値を重視し、現存部分を最大限尊重し、復原については、屋根や外壁・ドーム内部など現存していない部分を元通り復原する必要ありました。資料が残っていれば創建時の図面・写真や文献などを参考に、資料が不足している場合は同じ設計者による建物の視察や専門家に意見を求める等の検討を重ね、忠実な復原を目指しました。

東京駅のシンボルであった屋根、戦後の復旧で八角寄棟になっていましたがドーム屋根が蘇りました。創建時と同じ天然スレートの一文字葺きです。既存のスレートは一部を生かし取りにして再生しました。洗浄加工を施し南北ドームを中心に再使用しています。全体でおよそ43万枚のスレートの内18%に及ぶ8万枚を再使用しました。一方ドームの頂上や窓回り壁面等に使われている銅版も様々な伝統的技法で復原されました。銅版加工の技法には形出し、はぜ掛け、ヘラ絞りなど、特殊な技術を巧みに使用しています。脱酸銅という素材で年々酸化し黄銅色から緑青をふいた屋根に変化していきます。

赤レンガ駅舎の外壁には仕上材として、化粧煉瓦・花崗岩・擬石等が用いられています。これらについては1階から2階までをできる限り保存し、3階部分は新たに復原しました。

創建時の化粧煉瓦は保存する事を優先して大部分をそのまま生かしました。煉瓦の色は一枚一枚微妙に違っています。今回の復原する化粧煉瓦も現存部分と風合いを合わせ調和させることを目標に、色合を検討して3色の煉瓦を制作、これをエリアごとに異なる比率で混ぜ合わせて施工しています。目地には覆輪目地が使われています。この技術は現代の職人には伝承されていない為、こての制作から技術の習得現場で実施した上で施工しました。柱型や窓枠の用いられている花崗岩、表面は小叩き仕上げでノミで細かい筋目をつける処理を施しています。石材は創建時の材料と同じく茨城県稲田産及び岡山県北木産を使用しました。また擬石は石に似せて作られた人造石のことで、表面を洗い出しという技法で仕上げています。材料にはセメント・消石灰・細かく砕いた花崗岩などの種石・珪藻土を用いており、配合の決定に際しては、創建時から残っている擬石の成分の分析結果や、当時の施工記録、左官職人の過去の経験等を参考に色合いや強度を検討しました。技能者が少なく現場で若手をベテランが指導しながら制作しました。

創建当時豪華なレリーフで装飾されていたドーム内部、漆喰と石膏で作られており天井と3階以上の壁全周を覆うとても荘厳な空間となっていました。ドーム内部に関して詳細な図面は残されていませんでした。戦後の復興工事でドームの天井は格子状のパネルで塞がれていましたが、焼け残った部分を3D計測などで詳しく調査し、復原の基礎資料としました。結果、当時のレリーフは予め制作しておいた石膏の部材を壁面に取り付け、その周りに漆喰を塗って仕上げているなどが判明し、残っていた損傷の少ない部材は強化処理を施して同じ個所に取り付けました。

壁面の8か所にある干支の動物は、輪郭が微かに判る写真しかありませんでしたが、骨格や筋肉などの付き方を考慮しデザインし、石膏で原型を作りこれを基に制作型を作り素材を複数制作しました。施工では壁面に漆喰を塗り天井と壁面にレリーフを固定し塗装を施し仕上げました。

こうして完成したドームの内部、文字通り保存と復原を追及し施工により創建当時の空間が蘇りました。

最後にこの工事で苦労した事は、東京の玄関口であり又日本最大のターミナル駅での工事で常に鉄道や歩行者と近接している事、既存の駅舎の地下で制約された環境での新たな構造物を作りさらに免震化をした事、既存の予測できなかった事への対応、さらに特殊な技術を持った職人の確保等の問題でした。今振り返って復原した姿を見ると夢のような気がします。まだまだ残工事が有りますが、10月のオープンセレモニーに向け頑張って参ります。

日本大学生産工学部 創生デザイン学科 非常勤講師
MAKOTO YAMAMOTO
環境・造形作家　山本　誠
〒352-0014 埼玉県新座市栄 3-7-7
TEL 090-8857-5182

感じること、学ぶこと

「かずこさん、かずこさん、どうかね～？」信州弁のやさしい調子で、看護師さんは部屋に入ってくると必ずこのように呼びかける。この八ヶ岳を望む諏訪中央病院に入院し 3 ヶ月が過ぎた。

女房は昨年の暮れから体調に異常を感じ、はじめは神奈川の病院で看てもらったのだが、その対応にしっくりせず、娘の勧めもあり、茅野のこの病院でお世話になることとなったのである。

検査結果の出た日、家族はもちろん本人も呼ばれ、モニターを前に先生から詳しい説明を受けた。その時すでに、がんは膵臓から肝臓にも転移しており、手術が不可能な状態であることを告げられた。

身近な人間の生死を前にしたその時、それまではあまり気にもとめていなかった治療機関のあり方の重大さを思い知らされたのである。納得して治療を受けられ、最悪の場合には信頼して委ねられる思いやりのある、そんな病院を。

本人はどんな気持ちで読んだのであろうか、鎌田實さんの「がんばらない」を渡された。そこには奇跡の病院がつくられるまでの奇跡の物語が書かれている。

ある時から緩和病棟を望んだのだが空きがでないため、個室に移ることになり、その時、師長さんに「ご自分の家のつもりで、お使い下さい」と言われた。その言葉の通り、息子が持ち込んだ加湿器の薬草の匂いに、誰一人何も言わず微笑みで接してくれた。看護師さんに「本に書かれた奇跡のような病院で働くのは、ある意味大変だね」と、声をかけたぐらいだ。その通りで、お医者さん、看護師さんはもちろん事務の方から掃除の方まで、誰もが温かく優しい。施設にも行き届いた工夫がなされ、4 人部屋の全てのベッドは窓に面し、八ヶ岳を一望できる。

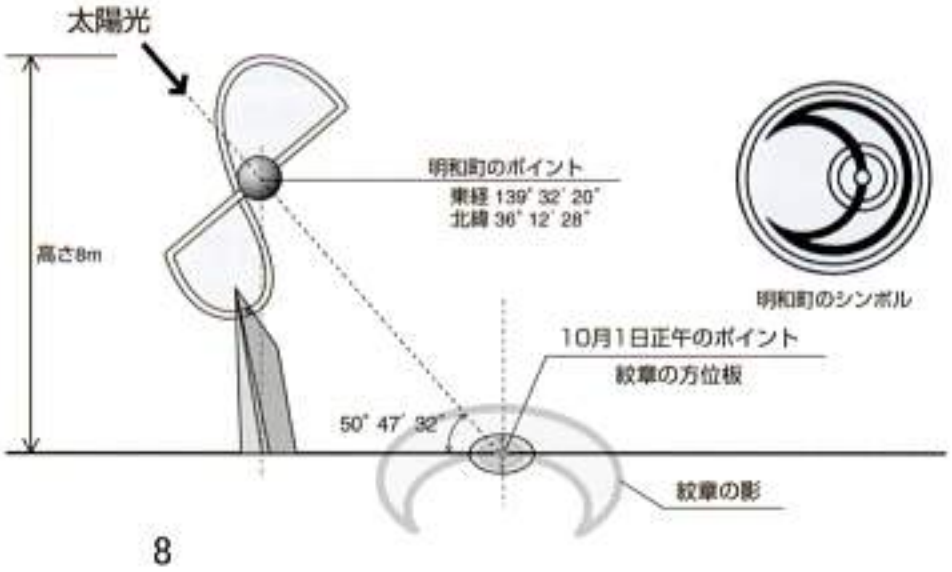
蓼科の春を待たずに、看護師さんたちにきれいにしていただき、退院の時に着るつもりでいたであろう自分で作ったお気に入りの服に着替えさせてもらい、お世話になった皆さんに見送られて家路に向かった。

残されたものを整理していたら「森田療法」に関する本が出てきた。私は知らなかったが、森田正馬（明治 7 年～昭和 13 年）は精神分析学に批判的な、名の知れた実践的精神科医で、「あるがまま」を受け入れることを重要視している。現在にも通じるどころか、ますます重要さを増すであろう治療法が、明治から大正にかけて既に完成していたのである。ともすると「こうあるべき」という概念（思想の矛盾）を前に空回りしたり、身動きができない私にとって、大切な示唆を与えてくれた。

鎌田實さんと森田正馬の思想と実践に共通したものを感じた。私が関わっている「造形」や「環境デザイン」の世界にとっても重い課題をいただいたように思う。身の引き締まる思いである。（和子は 4 月 12 日に逝去）

群馬県明和町 町制施行記念モニュメント「明・和」
第 10 回 AACA 賞 特別賞受賞（協同制作　日高單也・小野行雄）

このモニュメントは、平成 10 年 10 月 1 日の町制施行を記念して製作された。毎年 10 月 1 日正午に、ループの影と地面に埋め込まれた方位版が重なり、明和町の紋章が表れる。光り輝く球体の「日」と「ループ」で、平和と人の「和」を表す。見る位置によって様々な形に変化するループの形体と、時々刻々と変化する影の造形が一体となった、時間と空間の造形を表現した。



「世界の日時計風景　」

小野行雄
日時計作家
日本建築美術工芸協会会員
新制作協会会員
元東京造形大学教授

太陽の方位や高度の変化を利用して“時”を知るのが日時計です。日時計は日中の時刻の推移だけでなく、１年の季節の変化も知ることができます。

人類が農耕定住生活を始めたころ、彼らにとって最も重要なことは、作物の種蒔きの時期・収穫の時期を知ることでした。　周囲の景色や植物の変化を指標としたり、また季節により規則的に変化する太陽の高度（樹木や、地面に刺さった棒などに太陽の光があたってできた影の長短）を観察してその時期を知ったと想われます。

エジプトのオベリスクはその機能の一つとして、地面に落ちた影の長さにより、季節を知ることに用いられたようです。また現存する最古の日時計は約3500年前のエジプトの携帯用のものといわれています。全体はL字形をしていて、垂直部分にあたった太陽光が水平部分に影をつくり、５ヶ所ほど作られたポイントのどの位置に影の先端が来たかで時刻を決めていました。

ギリシャ・ローマ時代になると、半球、４分の１球のスリバチ状の日時計や、アテネの“風の塔”のような壁型のものが作られました。

当時の時刻制度は、我国の江戸時代と同じく不定時法で、季節に関係なく日の出、日の入りを基準としていたようです。

中世ヨーロッパでは、教会の塔などにしばしば日時計が見られますが、これは日々の“お祈りの時刻”を知るのに使われました。また少し変わったものとしては、教会内部の床面などに南北のラインが画かれ、その真南方向の屋根や壁に空けられた穴から入るスポット光の位置で、その地方の南中（正午）と、季節が読めるようになっているのがあります。これは例えば復活祭の日を決めるのに使います。スポット光がライン上の春分の位置に来た日から数えて最初の満月を迎え、次の日曜日がその日と決定されます。なおライン上には細かな目盛と共に十二星座のシンボルや絵が、描かれています。

14世紀に入り、ヨーロッパで機械式時計が発明されましたが精度の点で難があり、この時代から500～600年にわたり、日時計の示す正午で機械式時計の狂いを修正するという時代が続きました。　イタリア・シエナのカンポ広場にあるマンジャの塔の機械時計も、その右脇にある正午日時計で時刻補正されていたようです。　古今東西、永く“時”の管理は為政者や宗教専権事項でしたが、ヨーロッパでは16世紀ごろから一般の民家の壁面などに日時計が作られ始めました。

やがて日時計の“時”は市民一人一人のものとして、宗教・伝説・模様などのさまざまなモチーフを取入れて互いに競い楽しむ装置として地域を豊かにしてきました。

太陽の光を受けて、その機能を発揮する日時計は、一年中快晴である事が望ましいのですが、必ずしもそうはいきません。例えば中部から北部にかけてのヨーロッパは南部の地中海沿岸の国々ほど晴天日が多くなく、また冬季の日照時間が短いなどの不利な面もありますが、日時計への想い(太陽への想い？)はとても熱いようです。 北緯50～60度に位置するイギリスの国内には四千を超える日時計があり、現在も大切に保存されています。形式とし平面型や壁型の日時計が大半を占めます。このほか北緯56度に位置するエジンバラでは18世紀、公園や庭園などに競うように多くの多面体日時計が作られ、この地域の特徴となっています。

教会や城などの窓にはステンドグラスの日時計が作られ、寒い冬でも室内から時を知り、太陽の光を楽しんでいます。

ミュンヘンの北東60キロの町ランツフートで見た教会の壁型日時計です。“幼いキリストと杖を持ったマリア”の図像をモティーフとして、フレスコの技法を用いて1734年に作られました。

色彩が綺麗で実に品のある素晴らしい日時計です。図柄にキリスト教に関連した図像を用いたものは、教会だけでなく民家にも、またヨーロッパ各地に在ります。

インド、ジャイプールのジャンタル・マンタルには1730年頃、ムガール帝国のマハラジャ、ジャイ・シンⅡ世によって建設された石造天文台で、高さ27メートルという巨大な日時計があります。2秒まで計れる目盛をもったこの日時計は半径15メートルの四分儀を東西に有した赤道型日時計です。“時”と“占星術”の為に作られました。

中国北京の故宮·紫禁城には三基の日時計があります。ここの太和殿南テラス東端の日時計はコマ型で高い四本柱の台上に設置されています。テラスの西端には灯篭型の石造屋の中に計量枡(1744年)が日時計と対的に置かれ“時”と“量”の管理が為政者の専権事項である事を強く印象付けています。写真は坤寧宮の南テラス東端に設置されている日時計で、支柱の形状は異なりますが形式は太和殿のコマ型と同じです。

民家に作られた日時計は圧倒的にヨーロッパが多く、形式としては壁型日時計が殆どを占めています。自分の家の壁に、時には色鮮やかに、様々なモティーフ、材料を用いた日時計を競って作っています。

現在もヨーロッパ各地で新たな日時計が次々に制作され楽しませてくれます。

我国の日時計は、江戸中期に長崎出島の商館長Herman Christiaan Kastens(在任1766～67)が居留地の花園に作ったのが最初のようです。

日本人としては、江戸後期経世論家·林子平が1775年に長崎遊学の際、通詞や蘭学者との親交中に出島の日時計を模写し、後年仙台の塩釜神社に設置したのが始まりのようです。この石造平面型日時計は現在の時刻制度と同様に定時法(1日を12又は24等分割)の表示であり、当時の不定時法(日の出ー日の入りを基準に6·6分割)とは合わなかった為、これ以降広まることはなかったと思われます。　江戸時代の後期になりますと、庶民文化の興隆と職人の多彩な技の基に、象牙·銀·銅·漆などを用いた携帯用を中心に不定時法に合った三種類の日時計が考案されました。第一の形式は凹型のボール状ををしたもので、底部中央に垂直棒（ノーモン）があり、太陽の光を受けて、先端部が内側目盛に影を落とし時刻を示すものです。一見、韓国の仰釜日時計に似ていますが、太陽の方位だけでなく季節による高度も考慮して不定時法に合うように工夫され、各時刻線の目盛りが北側の一点に合うように工夫され、目盛がその一点から放射状に広がるように画かれています。同時代の二丁天符の機械時計と同様に、世界的にも独特な形式で、根付などにも多用されました。第二の形式は月別による太陽高度の変化を捉えて時刻を示すものです。夏至の正午頃東京では太陽は頭の真上にあるように感じますが冬至の頃はぐっと低くなり約30度になります。この月別による太陽高度の変化を応用した日時計で、七種のゲージで構成と取り出せ、南北を合せる必要がなく、その月の短冊を立て、太陽に向けるだけで容易に時刻が分かるという傑作です。幕末、シーボルトは旅行者がこれを携帯している事に驚き、「江戸参府紀行」で言及しています。当時、江戸などの大きな町では“時の鐘”が庶民に時刻を告げましたが、旅先では非常に便利なものだったのでしょう。また、松尾芭蕉の「奥の細道」で同行の曾良の旅日記に、“前夜より雨降る、辰上刻止む···”など、しばしば時刻に関する詳細な記述がありますが、芭蕉・曾良もこの様な紙日時計を使用していたのではないでしょうか。

第三の形式は、少々特殊な日時計で正午計と言います。携帯型の正午計には方位磁石が内蔵されており、太陽の南中を捉えて正午を示すものです。また、江戸時代のいつごろ設置されたかは不明ですが高知城に石造の正午計が作られています。これは当時の機械時計(櫓時計·尺時計など)や香時計などが温度や湿気などの影響で狂い易かった為に、その時刻調整用に使用されました。明治·大正時代は江戸期を引き継ぎながら、更にこの時期西洋の影響が加わりローマ数字などを用いたハイカラな携帯用日時計が考案されました。

昭和に入り戦前には壁面型日時計(天智天皇御陵)や水平型日時計(一橋大学・国立)など設置型の日時計が作られました。戦後になりますと、復興への想いと子供たちへの教育的見地から、小原銀之助氏の平面型日時計や、地域・企業・団体などの後援による日時計が学校や公園に設置され始め、日本各地で一般の関心も高まってきました。

近年は日時計の形式・デザインも多様化し、太陽の光を楽しむ環境造形として、公共の場だけでなく個人用としてさまざまな生活の場面に登場しています。

“東はりま日時計の丘公園”には遊び心のある子供参加型日時計が多数置かれています。世界の5都市の今の時刻を知ることが出来る日時計、自分を指針にして中央の月別のラインに立ち、自分の影で時刻を知る日時計も有ります。宿泊設備もありますので一度行って楽しみませんか。

関西の研究学園都市“けいはんな”に作られた日時計は指針の高さ約20m長さ約35m文字盤の面積が約4000㎡で世界最大の日時計としてギネスに登録されています。

おわりに　太陽の光が日時計に当たっているのをジッと見ていますと、ゆっくりと、しかし着実に時が過ぎ行く様子に改めて感動します。

太陽の明るさや暖かさやをそして大いなる恵みを、五感を総動員させて子供たちに(もちろん大人にも)感じてほしいものです。

私にとって“日時計”は“太陽·地球·自然”へのオマージュです。

東京天文台(筆者作)

平成２４年度　第一回AACA会員展　2012年4月20日～5月4日

出展作品　（＊印　は一般参加）

雨山智子　「時を刻む…記憶の音 Ⅰ・Ⅱ」
（布・木製パネル）

稲垣弘子　「Spring garden　Ⅰ・Ⅱ」
（アクリル板・アクリル絵の具・水彩紙）

平野雅子(＊)　「宙　（どこへ）」
（油彩・キャンバス）

二井　進　「層一層（ソウイッソウ）」
（アルシェ紙・鉛筆）

間地　紀以子
「繋　Ｋｅｉ」
（Ｔシャツ・シュロ縄・他）

鍵井保秀　「HEARTFULL －1114」
（インクジェットプリント/アセテートフィルム）

渡辺雅子　「 時の間 」
（油彩・ミックスメディア）

石塚一男　「 close 54:25:30 」
（合板・黒鉛）

細井健二　「 POSTER A・B 」
（グラフィックパネル）

川村純一・櫻井建人　「 A3 Project 」
（パネル・建築模型）

片岡雅子　「 季節風 」
（七宝）

片岡眞幸(一般)　「 風の訪問者 」
（リトグラフ）

谷口千恵子(＊)　「 軌跡 」
（フレスコ）

出居麻美(一般)　「 on the wall　」
（絹・レーヨン・綿・ポリエステル・塩化ビニール）

鮫島貴子　「 小さな種のゆくえ 」
（銅・真鍮・アクリル・他）

杉本　充　「 requir 2011 」
（白亜下地/硼砂カゼインテンペラ）

沢口炫三　「 作品　その１」
（麻地・天然土）

石丸繁子「 子規の俳句・漢詩 」
籾干すや雛遊ぶ門の内
雞犬狐村富　松菊三逕聞
南窓倦書起　門外有青山
（ 書・軸 ）

佐藤総合計画　「 隅田川表裏反転
（パネル・模型）

山崎輝子　「 旗 」
（皮革）

石井　春　「 キューブ 」
（セラミックス）

中野恵美子(＊)　「 並び立つ 」
（綿・ポリウレタン/ジャガード織）

中村弘子　「 crop field 」
（ステンドグラス）

平山健雄　「 光の記憶 」
（ステンドグラス）

「 出会う・meet with 」
（チタン）

鈴木法明

「 土俵の蛙 」
（鉄・ステンレス）

浦山不二秀(＊)　「ＰＯＳＴのある風景」
（金属）

野口真理　「current」
（陶・粉漆・金属箔）

村松勢津子　「共に在る」
（鉄・鏡）

安河内敦子　「シェル」
（ガラス）

川原　昭　「芽ばえ」
（ＦＲＰ）

吉野よし子　「芽命・めぶき」
（金属）

東日本大震災　「芸術環境復興預金」へ募金のお願い

6月末現在　57，921　円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体に50万円の寄付を行なう事になり預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたしま
復興預金口座は下記に記載いたしました。

郵貯銀行　港芝五支店　当座預金　口座名：　AACA芸術環境復興預金口座
店　番：　０１９　口座番号：０３３８３８３

新入会員・会員の移動　（2012年4月～2012年6月　敬称略）

新入会員

個人会員

岡　房信	〒104-0052	中央区月島 1-8-1-1804	TEL 03-5548-3523	三井不動産A・E㈱
島田恭子	〒321-4217	芳賀郡益子町益子 3531	TEL 0285-72-2669	陶芸
中野恵美子	〒167-0053	杉並区西荻南 2-11-14	TEL 03-3333-6387	テキスタイル
根本弘昭	〒811-3221	福津市若木台 6-11-3	TEL 0904-43-4413	アートディレクター

法人会員

株式会社　小松物産　　代表取締役　馬　松　　担当　東京支店　山崎賢治　　TEL 03-3270-7607
〒545-0021　大阪市阿倍野区阪南町 6-9-8 小松ビル２階　　TEL 06-4700-6077

会員の移動

岩井光男	個人住所変更	〒158-0091 世田谷区中町 2-38-11	TEL 03-5706-3656
小倉善明	個人住所変更	〒108-0074 港区高輪 4-8-11-702	TEL 03-3449-4560
藤井仁志	個人住所変更	〒166-0015 杉並区成田東 5-17-18-503	TEL 090-3287-7133
TOTO株式会社	法人代表者部署名変更	マーケティング本部　副本部長　城之下 洋	
	担当者部署名変更	マーケティング本部　営業情報部　担当部長　江藤祐子	
㈱メック・デザイン・インターナショナル	法人代表者変更	代表取締役社長　豊泉正雄	
	担当者変更	業務統括部　ユニット統括マネージャー　紅谷芳明	
保土ヶ谷バンデックス建材株式会社	法人住所変更	〒104-0028　中央区八重洲 2-4-1 常和八重洲ビル９階 本社・東京支店 TEL03-5299-8170　特販部 TEL03-5299-8205	
三協立山アルミ株式会社	法人会社名変更	三協立山株式会社・三協アルミ社	
㈱川島織物セルコン	法人担当者変更	インテリア営業本部　法人営業部　次長　那須田 実	

訃報　瀬川秀之会員（前広報委員会委員長）

瀬川秀之会員がご逝去されました。　　平成24年5月31日（享年83歳・心不全）

1929　横浜生まれ　　1954　日本大学工学部建築学科卒
1954　建設省関東地方建設局入局　1955　日本住宅公団へ出向
1971　㈱集団住宅建築研究所入社　建築部長、専務として工事管理業務を統括
1989　同社社長就任　社名を集研設計と改める。　2000　会長就任
1992　1月　AACA入会（中川幸成氏紹介）
2000　10月　広報委員会　委員委嘱　　2011　4月　広報委員長委嘱

瀬川氏は、入会後、各地シンポジウム・フォーラム・講演会等、殆んど欠かさず参加され協会活動を支えられ、又　広報委員・委員長として11年に亘り、会報の発行、維持に貢献されました。さらに、2007年8月～11月まで事務局補佐として協会会計の改善に尽力戴きました。　　心よりご冥福をお祈りいたします。

会員投稿記事　募集中

会員の皆様の
作品紹介、活動報告、
展覧会、個展等のご案内
企業の広告、出品展等のご案内を
会報に掲載いたします。詳しくは
広報委員会にご相談ください。

会報について
会報への　ご意見　ご希望を
お寄せください。　（広報委員会）

発　行　社団法人　日本建築美術工芸協会
発行人　会長　中島昌信
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20　建築会館6階
Tel　03－3457－7998
Fax　03－3457－1598
Url　http//www.aacajp.com
E-mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
委員長　野口 真理
委　員　石田 眞人　神谷 ふじ子　竹生田 正
中村 弘子　山崎 輝子
事務局

印刷協力　美和野印刷株式会社